

# 化学教育 徒然草



## 持続可能な？ 化学グランプリ・オリンピック

MIYOSHI Norikazu

三好徳和

徳島大学理工学部理工学科 教授  
化学グランプリ・オリンピック委員会 委員長



巻頭言

今年で19回目を迎えた化学グランプリは、これまでで最多の4,182名の生徒が受験してくれた。先日発表になった大学入試センター試験の高等学校からの申し込み数(438,250名)から見ると、実にセンター試験受験者の約1%に匹敵する。化学グランプリ一次選抜はマークシート型解答であり、未履修者であっても「化学好き」なら正解可能なものから、考えれば解けるようにリード文は付けているものの大学院入試レベルのものまで出題されている。それでも正解率が35%前後あり、皆さんが果敢にチャレンジしてくれていることは、主催者の一人として嬉しい限りである。2021年には、日本では2度目の国際化学オリンピック(第53回大会)が大阪で開催される予定である。化学グランプリは、国際化学オリンピックの代表候補の選抜を兼ねており、さらに多くの生徒が参加することにより、国民的な行事になって欲しい。ただ化学グランプリがより知名度を増すに従い、今までの内輪のボランティアで行っていたものが、種々の社会的制約を生じつつあるのも事実である。加えて参加者が増えることは望ましいが、それなりの基礎費用は必要であり、諸手を挙げて参加者増を喜べない現実がある。

話は少し変わるが、私は徳島大学においてESD(持続可能な社会づくりのための教育)に関わる機会があった。私なりにESDの精神は、「持続可能な社会づくりのために、相互理解に基づき権利と義務を分かち合う精神を涵養する教育」であると考えている。教育を高いに例えると顰蹙<sup>ひんしゅく</sup>を買うのは重々承知しているが、一部はある種「近江商人の三方良し」(「売り手良し」「買い手良し」「世間良し」)に近いものが感じられる。一方、教育一般において学校を取り巻く報道の一部を聞くと、「買い手(生徒+保護者)良し」「世間(社会)良し」は求められるが、教員は「商人」ではないので「売り手(教員)良し」は語られず、ある意味「聖職者」として過大な期待が求められているのではないかと思考する。

化学グランプリ2次選抜に参加する生徒と接すると、本当に化学好きで今後の日本の未来の「人財」であると確信でき、この生徒らを伸ばすことは我々の使命である。ただ、化学グランプリの拡大により国民的行事になった際、高校の現場にて教員側に過度な負担生じないことを願うとともに、本事業が持続可能なものである様、皆様はもとより社会全体からのご理解とご協力が得られればと願う次第である。

[連絡先]

770-8502 徳島県徳島市南常三島1-1 (勤務先)